

# 映画「武訓伝」批判と「愛すべき人」

## —毛沢東と習近平の「文芸講話」の間

泉 谷 陽 子

### 1. はじめに

近年、世界各地でポピュリズム勢力が台頭し、ポピュリストが指導者になる例があいついでいる。1978年の改革開放以降、経済発展をとげた中国もまた、諸外国と同様にグローバリゼーションの影響を強く受けているが、それでもなお中国共産党（以下、中共と略記）による一党独裁を維持している。経済発展によって民主化が進むのではないかという楽観的な予想を裏切り、経済発展のために政治的な安定が必須であるという論理で、ますます共産党支配の強化をすすめている。

そのような中国で、世界的なポピュリズムの台頭はどのように受け止められているのだろうか。滝田豪「中国における民主主義観の対立—リベラリズムとポピュリズム」<sup>1)</sup>によれば、中国では1989年の天安門事件で民主化運動が挫折すると、民主化陣営が改革派知識人と「新左派」の両陣営に分裂し、民主主義観の違いから対立するようになった。互いに相手陣営を「ポピュリズム」と批判しているが、政治学的観点のみれば、間接民主主義を称揚し大衆動員を否定する改革派よりも、大衆の政治参加を求め直接民主主義を称揚する「新左派」のほうがポピュリズム的であるという。

滝田は両者の論争の嚆矢は、毛沢東と文革の再評価をめぐる崔之元論文であったと指摘し、毛沢東とくに文革期の政治手法をポピュリズムであったととらえている。改革派は文革的手法を否定するが、「新左派」は毛沢東時代の「大民主」にも合理的なものがあつたとみている。毛沢東の政治手法といえ、近年では、薄熙来が文革時を彷彿とさせる「唱紅歌」や「掃黒」など大衆煽動的政治をおこなったことや、薄のライバルであった習近平が党主席就任後、強いリーダーシップを発揮し、腐敗撲滅運動などで大衆的人気を得ていることを想起するものも多いただろう。2018年の全人代において習近平が国家主席の任期制を廃止したことは大きな注目を集め、毛沢東化への懸念が強まっている。

こうした近年の世界および中国の政治情勢を念頭におきつつ、本稿では、「ポピュリズムとアート」という研究テーマにあわせ、中華人民共和国建国初期の文学芸術（中国では文芸と略称、以下文芸と表記）に対する政策をとりあげ、中国

の現在について考える視座を提供したい。毛沢東時代の文芸は、1942年の「文芸講話」が基本方針であったことから、まず「文芸講話」とその時代背景を簡単に振り返り、それが建国後にどう継承されたのか、具体的な作品をめぐる論争や称賛から、その大きな流れを考察していく。

まず、建国後最初の文芸に対する批判闘争であったといわれる、映画「武訓伝」批判をとりあげる。この批判運動については、文学研究の立場からいくつか研究が発表されているが、政治の動きや政治宣伝との関連付けが十分ではないように思われる<sup>2</sup>。中共によって芸術は政治宣伝の道具と明確に位置づけられていたからには、まずは当時の政治状況や宣伝工作と関連付けて理解することが必要であろう。また、「武訓伝」批判を指導したのは、ほかならぬ毛沢東であることが明らかになっている。毛沢東は文学者ではなく、国のトップとしてさまざまな政治判断を日々行わねばならない政治家であった。毛沢東が当時、各方面へ発出した指示などから、どのような政治判断のもとに、この批判運動を発動していったのかを考察したい。

カス・ミュデほか『ポピュリズム—デモクラシーの友と敵』<sup>3</sup>によれば、共産主義では共産党は人民の前衛党であり、人民の導き手であると自称しているので、ポピュリズムというより、その攻撃対象であるエリート主義であるという。ただし「共産主義とファシズムは動員段階期にポピュリズムに軽く手を出す」（54-55頁）とも述べており、両者の関係は複雑である。同書ではポピュリズムを、「社会が究極的に『汚れなき人民』対『腐敗したエリート』という敵対する二つの同質的な陣営に分かれていると考え、政治とは人民の一般意志の表現であるべきだと論じる、中心の薄弱なイデオロギー」（14頁）と定義している。こうした理解を中国現代史の文脈においてみるとどうなるだろうか。

中共の支配の正当性を考察した三品英憲の研究によれば、毛沢東は「人民の意志」を含む現実の解釈権を独占し、党はその毛沢東から正当性を調達するという構造を建国初期の段階ですでに成立させていた<sup>4</sup>。「人民」のなかのさまざまな相違や格差、利害対立は無視され、均一なあるべき「人民」が想定されていたといえよう。「人民」を均一的存在とみなすのは、現実離れしているが、長期にわたる戦争を戦いぬくには、異分子を排除して団結しなければならない現実的要請があった。そしてあるべき「人民」の究極が、戦場や生産の現場で自己犠牲的精神を発揮して活躍する「英雄」である。そこで、映画「武訓伝」批判のつぎに、「民族の英雄」をたたえる「誰がもっとも愛すべき人か」という散文を検討する。「人民」「民族」「英雄」といった言葉を手掛かりに、現在にまで続く政治と文化芸術の関係を考えてみたい。

## 2. 建国前後の文芸界

### (1) 「文芸講話」の聖典化：第一回文代会

毛沢東時代の文芸の大方針であり規範でありつづけた毛沢東の「文芸講話」は、1942年5月、当時中国共産党の根拠地であった延安で開催された文芸座談会で毛沢東がおこなった講話を整理したものである。毛沢東は、文芸は労働者・農民・兵士（労農兵）のために奉仕すべきであり、作家や知識人は、労農兵の生活に深く入り込み、プチブル的思想を改造しなければならない、作品評価の基準は「政治が第一、芸術が第二」であり政治基準を優先しなければならないとした。このときの「文芸講話」が建国後に知識人たちを攻撃する武器となるのだが、1942年の講話はまずは、1942年の状況に照らして考察しなければならないだろう。

1942年といえば、当然のことながら、日中戦争のさなかである。41年12月、太平洋戦争がはじまると、日本軍による共産党根拠地への攻撃はさらに激化した。くわえて41年1月の新四軍事件に象徴される国民党軍との衝突も発生し、共産党地区への経済封鎖などが行われた。このころが共産党にとって一番苦しい時期であった。一方、延安は、抗日の聖地をめざしてやってきた多くの都会出身の学生や知識人とで人口が急増したが、彼らと古くからの共産党員・幹部や地元農民たちとの価値観・意識の違いは大きかった。待遇の格差や物質的苦境に対する不満や鬱屈が徐々に蓄積され、一部は表面化していた。そうした状況に対し、毛沢東思想によって思想の統一を図ろうとしたのが、42年初頭に始められた「整風運動」であり、その一環でおこなわれたのが文芸座談会であった。つまり、戦時の非常に困難な状況下で直面していた問題に対応するための講話であり、これによって戦時体制のひきしめをおこなったのであって、平時の文化芸術の理論とは異なることに注意が必要である。

戦時の産物であった「文芸講話」が、中共の軍事的勝利によって正当化され、建国後もなお文芸工作の方針として維持されるのだが、建国から50年にかけては比較的平穏な時期であり、「文芸講話」の運用もまた比較的穩健であった。建国直前の49年7月、北京で文芸界の著名人をほとんど集めたという大規模な文芸関係者の会議、中華文学芸術工作者代表大会（文代会）が開催された。この大会において「文芸講話」を建国後もひきつづき貫徹することが宣言された。また中華文学芸術界連合会という文芸界の全国組織が成立した。会長に選ばれた郭沫若は、「文芸講話」の精神そのままに、芸術家たちに労農兵との結びつきを求め、工場や農村、軍隊などへの参観をよびかけている。だがその一方で、芸術家に対する要求は高すぎてはいけない、「無理強いしてはならない」とも述べている<sup>5</sup>。戦時

下の一地方であった延安の論理が全国に適用されるにあたり、さまざまな混乱や問題が予想された。それらをなるべくおさえつつ新国家における文芸界を発展させたいという意図からであろう。

穏健方針は、『紅旗歌』をめぐる論争にも表れていた<sup>6</sup>。この作品はある紡績工場の労働者たちの「解放」前後の変化を描いたもので、もとは演劇であったが、のちに映画化もされた。演劇は大衆受けがよく、南京では演劇として史上最高の客入りを記録したという。全国各地で上演され、劇評も多く書かれたが、ほとんどは肯定的な評価であった。ところが、50年2月、文芸界の権威的雑誌『文芸報』に作者を「プチブル的」と批判する論評が掲載された。主人公の女工が「解放」後に新しい思想や行動になじめず、ほかの女工たちと溝を深め対立していく。そうした労働者の描きかたが問題となった。「解放」後に主人公のような頑迷で立ち後れた労働者はいないはずだ、そのように描くのは作者の思想に問題がある、と批判されたのである。こうして『紅旗歌』についての討論がひろくおこなわれたが、このときには批判への批判が上回り、5月10日、おなじく『文芸報』に、党を代表する文芸評論家周揚が同作品を肯定する評論を発表したことで論争は終結した。この論争を紹介する于風政は「この時の文芸指導者たちは『左』への偏向を警戒し、あまりに過激で広範な文芸工作者から反感や反対を受けるようなやり方を抑制」した<sup>7</sup>、と結論づけている。

こうした穏健な方針は、文芸界だけでなく、経済政策でも同様であり、共産党が政権を奪取したからといって、すぐさま社会主義への移行を図ったわけではなく、資本主義的發展も容認する新民主主義政策が採用された。50年6月の中共7期3中全会でも毛沢東は、社会主義は「まだ遠い将来」とし、移行についても明らかにしてはいなかった。こうした発言は口先だけではなく、50年春、急激な景気後退で危機に陥った民間企業を救済するための各種措置がとられていた。こうしたブルジョワジーや知識人に対する寛容な態度が一変するのは、朝鮮戦争に中国が参戦し、とくにその長期化が危惧され、米中対立という冷戦構造が顕在化した51年以降のことである。

## (2) 朝鮮戦争参戦後の方針転換

朝鮮戦争が勃発したのは、1950年6月25日であるが、この時点ですぐに中国へ影響が波及するとは考えていなかった。中国は北朝鮮からあらかじめ開戦を知らされていたが、それでもなお、長年の戦争で肥大化した軍隊を整理し、100万以上の兵士を復員させる予定を変えなかった。米国がすばやく反応し、米軍主体の国連軍を派遣したことは予想外であった。国連軍が北朝鮮軍を押し返し、北緯38

度線を越え、中国の国境に近づいてくるにしたがい危機感は高まった。参戦の是非をめぐり指導部内で議論が重ねられ、最終的に毛沢東の強いイニシアチブによって志願軍派遣という形で参戦することになった。世界最強の米軍と戦うことができるのか、と懐疑の声が大きかったが、参戦から第三次戦役までは予想外に順調に勝利をおさめることができた。51年1月4日、ソウルを占領し、戦線を37度線まで押し返し、朝鮮問題の早期解決という楽観論も芽生えた。しかし、51年1月半ばに始まる第四次戦役で状況が一変した。米軍は体制を立て直し、本格的な反攻に転じ、中国側は大敗を喫した。2月初め、毛沢東は朝鮮戦争の長期化にそなえ、志願軍を三編成とし交代制をとる準備を指示した。3月1日、毛沢東はスターリンに対し、この方針転換について電報で知らせ、朝鮮戦争は長期化の可能性があり、少なくともあと二年戦う準備をしておかなければならない、と説明している<sup>8</sup>。こうした国の存亡にかかわる情勢の変化を受けて、51年2月半ば、政治局拡大会議が開催された。同会議の詳細は不明だが「戦争の危機への対応を前面におし出して既存の政策の全面的見直しを行った重要会議<sup>9</sup>であったとされる。たしかにこの会議を境にさまざまな政策の変化がみられた。

たとえば、土地改革は50年6月末に公布された「土地改革法」により、「段取りを追って、秩序あるやり方」で、内戦期とは異なり、極左的偏向を回避しておこなわれるはずであった。しかし、実際に改革をはじめると50年末にはすでに中国は朝鮮戦争に参戦しており、その影響で、運動は加速化、急進化をまぬがれなかった。党は貧しい圧倒的多数の農民を組織するために「地主階級」に対する憎しみをあおり、徹底的な闘争を推進していった。

また、内戦の延長であった「反革命鎮圧運動」もまた中国の参戦以降、激しさを増していった。50年10月、「反革命分子」に対して「寛大すぎた」として、是正指示が出された<sup>10</sup>。運動は社会各層で反政府的と疑われる人物をあぶりだしていく。国民政府で役職にあったものや知識人、町のチンピラ、民間宗教の信者、秘密結社のメンバーなどである。反革命分子は摘発されると大抵は大衆を集めた大会でその罪を告発され、即時処刑される者も少なくなかった。たとえば各都市の模範とされた北京では、2月22日時点の計画で、死刑にすべき犯罪者を1,300名としていたが、実際に51年3月18日までに81名を、3月25日には199名の処刑をおこなったと報告している<sup>11</sup>。

上述した土地改革、「反革命鎮圧運動」と並び、建国初期の三大運動のひとつにあげられるのが、抗米援朝運動である。抗米援朝とは、米国に抵抗し、朝鮮を助ける、という意味であり、戦争に国民を大動員しようとする運動である<sup>12</sup>。この運動を指揮する抗米援朝総会が成立したのは、10月26日である。つまり志願軍

が最初の戦闘をおこなったのとはほぼ同時にこの運動が始まった。運動の初期、その重点は宣伝工作にあった。参戦の必要性を説明し、参戦への支持をとりつけること、また米国に対する恐れや崇拜の感情を払拭して反米思想を植え付けることが求められた。宣伝工作は組織化や人員が十分でなく困難であったが、それでも戦況が優勢であれば、人々に勝利への自信をいだかせ、戦争支持をひろげることができた。しかし、第四次戦役で敗戦して以降、戦争の長期化が見込まれ、本格的な戦時体制の構築が必要となるなかで、いよいよ人民の総動員が目標となっていく。戦時体制への回帰は延安時代への回帰ともいえ、「文芸講話」は延安時代と同様に聖典化されていくのである。それが映画「武訓伝」批判によって明らかになった。

### 3. 映画「武訓伝」批判

#### (1) 「武訓伝」の上映と反応

武訓は清末に実在した人物で、貧しい家庭出身で自分が非識字であることを悔やみ、貧しい家の子供でも勉強できる「義学」をたてることを決意した。そのため彼は数十年にわたり乞食をしてお金をため、ついに3か所も義学を設立した。この偉業は同時代すでに称揚され皇帝からも褒美をもらい、牌坊（記念のための鳥居のような門）まで建てられた。民国期になっても、その偉業をたたえる者たちは後を絶たず、武訓の絵付き伝記である『武訓画伝』も出版された。

民国期から活躍する有名監督であった孫瑜が「武訓伝」が映画化しようとしたきっかけは、1944年夏、有名な教育家陶行知から『武訓先生画伝』を贈られたことだった。孫瑜は武訓の偉業に感動し、脚本を執筆したが、内戦の影響で撮影が続けられなくなった。人民共和国成立後、撮影を再開し、幾多の困難をのりこえて50年末についに完成した。制作の途中で「中国革命」による人民共和国成立という大きな転換を経験したことになる。そのため脚本も「解放前の反動政権下では許されなかったセリフとはっきり表現できなかった革命的行動などを明らかにするなど一部修正」が加えられた<sup>13</sup>。

たしかに現在、同作品を見ると、冒頭および中間、終盤に人民共和国成立後のシーンが挿入されている。人民服に身を包む若い女教師が10名ほどの児童に取り囲まれながら、昔は貧しい家の子供は勉強ができなかったこと、現在はみんなが勉強できるよい社会になったことなどを語る。映画の結末は義学の設立に成功してめでたし、ではなく、どんなに苦勞して学校を建設しても、暗黒の社会自体は変えることができないことに武訓自身も気づき、さまよい続けて終わる。もとの賛美劇から悲劇に変更したのも、国民党から共産党へ統治権力が変化した影響で

あると監督は語っている。共和国成立前後の変化をわかりやすく描いており、現在の日本人の眼でみれば、プロパガンダ臭を感じざるを得ないだろう。しかし当時は鑑賞後の感想として「武訓のために何度も涙を流した」と書く者は多かった<sup>14</sup>。長期の戦乱を生き抜いた当時の民衆にとって、武訓の艱難辛苦は他人事ではなく、身につまされ、感情を強く揺さぶるものだった。

「武訓伝」はすぐに大評判となり、公開後二か月もしないうちに北京、上海、天津の三都市で称賛する文章が40篇あまり発表され<sup>15</sup>、人気の映画雑誌『大衆電影』では50年度のベストテン作品に選ばれ、特集記事も書かれた。民国期の『武訓画伝』が再出版されたり<sup>16</sup>、さらに中国独自の絵付き本である連環画になったり、一種の武訓ブームが起きた。このころ孫瑜は武訓について「我が中華民族の勤勉、勇敢、賢明という崇高な品性の典型である。彼を熱愛することで、我が民族を熱愛し、民族の自信と自尊を高めることができるだろう」と述べている。民族や国家への愛とつなげ、自信に満ちた口調で武訓を民族の誉れとたたえているあたりが、当時の雰囲気を反映していると思われる。まさか数か月後に反民族的、反愛国的典型へ転落していくことなど、このときの孫瑜は思いもよらなかったであろう。

## (2) 評価の急転換

一大ブームの陰で違う動きが現れるのは、51年3月末ごろである。「武訓伝」批判の最初の砲撃として有名な賈霽「訓と為すに足らざる武訓」によれば、彼よりも前に晴篠という人物が、3月25日付『進歩日報』に「武訓は中国の人民闘争を歪曲する反現実主義的人物であり、我々の良い伝統ではない」と厳しく批判する文章を発表していた<sup>17</sup>。

その後しばらくはあまり動きがないが、5月半ば以降、大量の批判があふれ出す。5月12日、『文匯報』に「武訓伝」について討論するための要綱が掲載された。その冒頭で武訓伝の上映によって、大衆のなかに誤った見方やよくない影響がひろがっている、それを急ぎ一掃する必要があると説明がつけられており、この時点ですでに、武訓や映画制作の間違いを糾弾する方向へ誘導されていた。また、要綱の筆頭に「武訓の出身と階級成分はどうであったか？」と、出身階級が重視されていることも注目される。武訓は貧しい労働者の家庭出身と誰もが思い、映画でもそのように描かれているのだが、そこに疑問を投げかけている<sup>18</sup>。

そしていよいよ共産党機関紙である『人民日報』に批判が掲載される。5月16・17日と二日続けて批判論文が掲載され、20日の社説が決定打となった。当時『解放日報』の編集の仕事に従事していた田鐘洛は、この社説の衝撃を回想して、

つぎのように述べている。「わたしが一面の重要ニュースを編集するようになって一年余りのあいだ、新華社が送る国内外の重要事件に関する『人民日報』社説はいつも収めていた。地方紙は必ず転載しなければならなかった。しかし、『人民日報』がひとつの映画のために社説を出すなど前代未聞のことで、驚きを隠せず、急いで社説全文を精読した」<sup>19</sup>。

「映画『武訓伝』についての討論を重視すべきである」と題された社説が毛沢東の執筆であることは文革期に公表されたが、毛の文章でなくとも、『人民日報』の社説であれば、全人民が従うべき指針とみなされたはずである。事実、社説発表の翌日には、教育部副部長が工作会議において「みんなで真面目に学習し、討論を展開する」ように呼びかけた。5月23日の時点で「教育部では一週間の学習計画がすでに立案」され、教育部全体で熱烈な学習を始めている」と報道された<sup>20</sup>。こうして、人民共和国最初の文芸界における思想闘争が本格的にはじまり、同年8月ごろまで続いた。

「武訓伝」批判は映画だけでなく、清末以来存在した武訓を偉人として賛美する風潮そのものにも及んだ。たとえば河北省臨清市にあった「武訓完全小学校」は「鎮立第一完全小学校」に改名され、表門を入れてすぐにある影壁に描かれていた武訓像は石灰で消され、小さな記念塔も撤去された。同市にあった武訓記念林は、9月1日に中国共産党によって接収されたことを記念する「九一記念林」へと改名された<sup>21</sup>。

このほかにも私立では北京武訓小学校、公立では平原武訓師範学校などが存在していたが、華北局宣伝部は民衆への影響を考慮し、いずれも武訓や「武訓伝」についての討論が深まり、思想がはっきりしてから、改名することにした。郷土の偉人に対する人々の思いを上から一方的に禁じることによる影響を考慮したものであったが、この一連の批判運動を民衆への教育として活用する意図もうかがえる。

6月、武訓についてさらに徹底的な調査が行われた。人民日報社と中央文化部が合同で組織した武訓歴史調査団を武訓の生誕地に派遣し、20日余りにおよぶ実地調査をおこなった。その結果が7月23日から28日の『人民日報』に掲載され、武訓の出身階級や行為の是非などについて決着がつけられた。批判が主流になってからも、清末という時点で支配階級に反旗を翻すことなどできない、歴史的な限界を考慮すべきだとか、結果ややり方はともかく、貧しい子供のためにという動機は評価できるのではないかという擁護論があった。しかし、「調査記」によって、武訓の生きた時代に同じ地域に農民革命の指導者がいた事実が明らかになり、また義学に通った子供はじつは裕福な家庭であったなど、とことごとく反駁され



る。武訓自身についても、貧しい家庭出身といいながら、まともに働かず、乞食となり、地主とむすびついて高利貸しをやっていたと、出身階級の観点からも擁護できなくなった。ちなみにこの調査団に参加していた李進という人物は、毛沢東の妻江青であることは周知の事実で、調査の結論は、当初より決まっていたという。

それでも、科学的実地調査を装った「調査記」の影響力は大きく、郭沫若はこれを読んだとき、「目を見張り自失」した、とその衝撃の大きさを語り、かつて自分が武訓を賛美し、『武訓画伝』の書名と題辞を書いたことを後悔する文章を公表している<sup>22</sup>。このように「調査記」は、武訓および武訓の賛美者を完膚なきまでに打ちのめす役割を果たしたといえる。

### (3) 「三大運動」との関連：周揚の論文を手掛かりに

文芸界の指導者周揚が8月8日の『人民日報』に発表した「反人民・反歴史の思想と反現実主義の芸術—映画『武訓伝』批判（以下、「周論文」と略記）」がこの「武訓伝」批判を締めくくる論文であった<sup>23</sup>。論点はそれまでの社説や「調査記」などに出尽くしており、目新しいものはない。しかし、ほかの論文と異なるのは、簡単ながら「三大運動」に言及している点である。以下、「周論文」と「毛沢東の文芸路線を断固として貫徹しよう」<sup>24</sup>と題した彼の講演（以下、「周講演」と略記）を手掛かりに、映画「武訓伝」批判と「三大運動」との関連を検討したい。

まず、「周論文」のなかで、周揚は、武訓を賛美する風潮が社会に与える影響、とりわけ共産党員に与える影響を憂い、深刻な政治闘争においては、改良主義や投降主義には反対しなければならないと強く主張する。そして、抗米援朝運動では、まず「米国に親しみ、米国を恐れ、米国をあがめる思想」に反対しなければならないし、土地改革では「平和的な土地の分配」という思想に反対しなければならないし、反革命鎮圧運動では、「果てしなく寛大」な思想に反対しなければならない、とつづけている。

ここで印象的なのは、深刻な政治闘争が必要であるという現状認識と、その一環として「三大運動」がより徹底的に行わなければならないという政治的要請である。先に述べたように、「三大運動」は中国の朝鮮戦争参戦以降、とくに51年2月の政治局拡大会議以降より大々的に急進的に展開される。つまり運動の途中で情勢に応じて変化していったのである。

中共上海市委宣傳部の報告によれば、映画「武訓伝」を制作した地元の上海では、「武訓伝」についての討論をすすめるうちに、「責任追及」に熱中し、「孫瑜を典型として、中国の映画や演劇界における米帝の映画の影響を一掃」しようと

する偏向が生じたという。この報告に対し、中央宣伝部『宣伝通訊』編集部は、それらは「不適當ではない」、「責任は追及しなければならないし、アメリカ映画の影響は一掃する必要がある」とコメントしている<sup>25</sup>。孫瑜が1920年代、アメリカに留学しウィスコンシン大学、コロンビア大学でシナリオ創作と監督法を学んでおり、当時の中国映画としては斬新な演出などをおこなったことが、批判された一因となったのであろう<sup>26</sup>。

土地改革と反革命鎮圧運動では、ともに階級区分が重要であったが、「武訓伝」批判でも武訓をどの階級に区分するかが、議論の焦点のひとつであった。「武訓伝」批判の決定的証拠とされた「調査記」の記述をかりれば、武訓は「大地主、高利貸し、大ごろつき」であった。いずれも人民の敵であり、土地改革と反革命鎮圧運動において徹底的に肅清されねばならない対象である。両運動を推進しつつ、糾弾すべき対象を賛美することは、毛沢東にすれば「何を称賛し賛美すべきか、何を称賛し賛美すべきでないか、何に反対すべきか」わかっていないことにほかならない。毛沢東はまた、つぎのようにも述べている。

武訓自身が考えていることが間違っていたのは大したことではないし、とくに影響もない。後世の人が彼の宣伝をするとなると事情が異なる。武訓の宣伝を借りて自身の主張をおこなうことである。しかも映画をとったり、著作や論文を書いたりして中国人民に大々的に宣伝を行うことは根本的な問題をひきおこす<sup>27</sup>。

毛沢東にとって「武訓伝」批判はあくまで、当時の政治宣伝にかかわる問題、もっといえば、最重要課題であった「三大運動」の宣伝にかかわる問題であったといえよう。

周揚は、「三大運動」について、武訓伝批判が本格化する以前の「周講演」ですでにつぎのように語っていた。

我々の文芸は一貫して愛国主義であった、また一貫して帝国主義の侵略と封建主義の圧制に反対するものであり、すべての侵略者と圧制者に対する憎しみとわが民族の運命に対する深い関心に満ちている。いま中国人民は国内外の反動派による自国における統治を転覆させ、自分たちの政権—人民民主專政を打ち立てた。中国人民の当面の任務は、抗米援朝で帝国主義の侵略に反対しつづけること、土地改革で封建主義を徹底的に消滅させること、反革命の鎮圧と肅清であり、そして生産を回復・発展させ、過去の歴史によってつ

くられた経済的・文化的に立ち後れた状況を脱却させ、経済が繁栄し、文化が発達した国家に中国を変えることである。中国の人民はいままさにこれらのきわめて大きな任務に奮闘している」。これまでずっと勤勉で勇敢な中国人民は、長期の革命闘争の過程で、人民民主の制度の下、鍛錬と教育を経て、日々自覚の程度を高めてきた。彼らのなかから不断に新しい人物が現れ、戦場や生産現場その他の場所で英雄模範が生まれている。我々の文芸は、まず中国人民の中のこれら先進的人物を表現しなければならず、中国民族と中国共産党の偉大な力を表現し、彼らの高度な知恵と英雄主義を表現しなければならない。帝国主義や封建主義が中国人民に対して長期にわたりおこなった残酷な暗黒の支配は、一方では中国人民の無限の革命的気魄と決意をつくりだしたが、その一方で一部の中国人にいくらかの民族的劣等感を植え付けた。こうした民族的劣等感と中国ブルジョワジーやプチブルジョワジー固有の動揺性や軟弱性といった特性がぴったりと結びついた。文芸の役割は、長期にわたり屈辱的地位におかれて生じた劣等感を一掃し、今日の国家の地位にふさわしく、偉大な中国人民がもつべき民族的自尊心をやしない、自身の偉大な力と輝かしい前途への人民の信念を強めることである。惜しむらくは、我々の文芸はまだこの点を完全には成し遂げていない。まだ「立ち上がった」中国人民の力を十分に表現していないし、その人物はいつも「精神面」で立ち上がっていない。ひどいときにはぺこぺこ腰をかがめて描かれている。人民の敵—帝国主義者や封建主義者、すべての反革命分子の罪状は大いに暴露すべきだが、芸術作品のなかにはあやまって敵の力を人民の力を上回るように描き、ひどいものは帝国主義者が我々中国人民の行為を侮辱するさまを面白おかしく描写して、自民族の尊厳をそこなっていることに気づいていない。

このくだりを読めば、なぜ武訓への賛美が問題視されたのかがはっきりするだろう。武訓は支配者層にいじめぬかれても決して逆らわず、逆にぺこぺことお辞儀をし、跪いて義学への寄付を頼みつづけたのである。その行為は決して模範とすべきものではなかった。

「周論文」ではより具体的に映画の一場面をとりあげて述べている。武訓が雇い主となる張挙人の前に初めてよばれた場面で、武訓は相手が「旦那様」だと知ると、緊張からぶるぶる震え、ぎこちなく跪くのである。

作者はそんな奴隷を労働人民の典型とみなし、民族の英雄として賛美しようとしており、愛国的観衆ならば容認できないところである。(中略) 大衆闘

争ではなく、人にこびへつらう投降主義で革命的英雄主義に替えようとしている。映画の中の武訓の姿は醜悪で虚偽的であり、わが国の封建社会の暗黒と卑劣さを表現している。彼を賛美するのは暗黒と卑劣さを賛美することであり、つまり反人民・反愛国主義である。

このように、武訓は愛国主義や英雄主義という肯定的価値の対極に位置付けられ、観衆にどちら側につくのか、を問うている。つまり、映画「武訓伝」をどう見るかが、愛国的かどうかの踏み絵となったといえる。では、この当時の愛国主義や英雄主義を体現するとみなされたのは、どんな人物であったのだろうか。

「周講演」では、建国以来の成果として、いくつかの優秀作品があげられている。多くは日中戦争や内戦において人民解放軍や人民がいかに勇敢に戦い勝利したかを描いた作品であった。それらの中で注目したいのは、朝鮮戦争の前線で書かれた魏巍の通信文「誰が最も愛すべき人か」である。映画「武訓伝」が批判されるのと反比例するように、この短いルポルタージュは絶賛を受け、模範的文芸作品としての地位を確立した。同時期に評価の明暗を分けた両作品を比較することで、英雄像の転換がはっきりと確認できるだろう。

## 4. 「誰がもっとも愛すべき人か」

### (1) 『人民日報』への掲載

魏巍<sup>28</sup>の散文「誰がもっとも愛すべき人か」(以下、「愛すべき人」と略記)は、中国ではかつて中学校の国語の教科書に採用され、数世代にわたり模範とされてきた文章であった<sup>29</sup>。日本ではあまり注目されてこなかったので、まず内容を簡単に紹介したい<sup>30</sup>。

「愛すべき人」は、朝鮮戦争の前線で取材した作者がとくに感銘を受けた3つの出来事を、自らの感動を率直に表現し、志願軍の兵士がいかに純粹で愛国的であるか、偉大な英雄であるか切々と訴える。3つの出来事とは、まず松骨峰での敵軍との壮烈な戦闘、つぎにある兵士が火事に遭遇したさい危険を顧みず子供を救った話、最後に防空壕のなかで兵士と交わした会話である。最後の兵士は劣悪な環境にもかかわらず明るさを失わず、自分たちが雪を食べるような苦勞しても、祖国の民が幸せならばそれでよいという。最終段落で作者は、中国にいる一般民衆によびかける。「あなたが朝いちばんの電車に乗って工場へむかうとき、あなたが鋤や鍬をかついで畑へむかうとき……」。この「あなたが……をするとき」という繰り返しのフレーズが印象的で、後の散文のスタイルに影響を及ぼしたというが、こうして、魏巍は日常の何気ない幸せが前線で戦う志願軍兵士たちによっ

て守られていることを読者に意識させている。そして、祖国や領袖を愛するように、「我らの戦士」を深く愛するように求め、「彼らは本当にもっとも愛すべき人なのです！」と断言して文章を終えている。

4月1日に執筆された「愛すべき人」は、もともと『文芸報』に掲載するつもりだった。しかし『文芸報』は半月刊で掲載までに時間がかかることから、「適時」に発表することを考え、4月11日の『人民日報』に掲載された。しかも一面トップであり、それは文芸作品としては異例のことであった。毛沢東は読後に「印刷して全軍に配布」するよう指示を下したというが<sup>31</sup>、異例の掲載自体に毛沢東から何らかの指示があったのかもしれない<sup>32</sup>。

## (2) 愛国教育の「経典化」

「愛すべき人」は、毛沢東だけでなく、朱徳や周恩来などほかの指導者からも絶賛され、全国にひろまり、知らぬものはいない作品となった。文学者のなかで真っ先に反応したのは、有名な女性作家丁玲である。単なる通信文で文学的価値がないという意見に対し、「愛すべき人」は「毛主席が指導する我が国の時代を反映」し、新しい人や偉大な事業を表現しており文学的価値があると反論した。映画「武訓伝」批判においても丁玲は『文芸報』批判の先鋒をつとめており、この時期の丁玲は「文芸講話」路線を忠実に体現している。こうして「愛すべき人」は、文学的価値も認められ、「経典化」していった<sup>33</sup>。

興味深いのは、単なる文芸作品として読まれただけでなく、当時ピークを迎えていた反革命鎮圧運動の学習教材として使用されたことである。中共平原省林県（現在は河南省林州市）県委書記の王大海は、毛沢東あてにつきのように反革命鎮圧工作の進捗状況を報告している。

当地ではまず勢力の強かった会道門（民間信仰団体）の摘発をおこない、公開裁判にかけ一貫道の幹部や特務ら数名を死刑に処した。しかし、宗教団体への摘発が先行し、抗米援朝と結びつけることやそのほかの反革命分子への弾圧が十分でなかった。そこで、幹部会や抗米援朝代表会などを開いて、志願軍帰国代表の報告を伝達したり、「誰が最も愛すべき人か」を学習したりした。こうして愛国思想をうちたて、全県で米帝が日本を再武装することに反対する告発を展開した<sup>34</sup>。

これより前、毛沢東は反革命鎮圧運動の宣伝が十分ではないことに不満を表明していた。

3月末、「反革命鎮圧運動工作の宣伝が不足している。反革命分子の活動を紙上で暴き出すことが少なすぎる」。「多くのところで、びくびくとして、大々的に反革命を殺すことができないでいる」。「数十人、百人余り、数百人、数千人、一万人以上の会議を利用し、新聞やラジオを利用し、展覧会を利用し、大いに宣伝」するようにと指示していた<sup>35</sup>。

また、4月には、西北局の定めた宣伝方法を他の地方でもおこなうよう指示を出しているが、その宣伝方法とは、「最も有効なのは告発大会、つぎに展覧会、そのつぎが新聞、ラジオ、文芸活動ですべてを組み合わせでおこなう<sup>36</sup>」というものだった。

このように51年3月から4月にかけて、毛沢東は文芸によって反革命鎮圧運動をおおいに宣伝することを求めていたのである。

こうした求めに応じるのに「愛すべき人」は格好の作品であったといえる。「愛すべき人」を使った教育は各地で行われ、行き過ぎた事例も報告されている。

西安市の各小学校では主要課目の中で盲目的に愛国主義教育がおこなわれ、学習に影響を及ぼすほどであったという。たとえば、ある小学校では「国語」「歴史」「算数」の各課目でいずれも「愛すべき人」を教材として使った。歴史の教師は「澠水の戦い（4世紀の戦い）」を説明するとき、また算数の教師は朝鮮の戦場における敵の死傷者を計算する問題を説明するとき、この教材を無理に使う「愛国教育」としていた<sup>37</sup>。

このように「愛すべき人」をあらゆる課目の教材とすることは行き過ぎであるという認識があったが、「愛国教育」の必要性を否定するものはおらず、その後もますます盛んにおこなわれていく。52年2月に出された「宣伝工作者への注意」では、「愛国教育」の基本的内容を、優秀な人物やその模範的事跡を宣伝して、人々に共産党のすばらしさや正しさ、人民解放軍や志願軍が「もっとも愛すべき人」であること、祖国の将来は明るいことなどを知らしめ、教育することであると説明している<sup>38</sup>。

こうして、中国社会に根強かった「よい鉄は釘にならず、よい人は兵にならない」という兵士に対する軽視・蔑視を払拭し、「愛すべき人」＝解放軍・志願軍の兵士である、という認識をひろめていった。英雄的人物の行為をほめたたえる目的は、英雄的人物の事跡を学習し、自分たちも同じような行動をするよう促すところにある。兵士の英雄化は、朝鮮戦争の長期化にともない緊急課題であった徴兵の進行にも、ある程度は貢献したのではないだろうか<sup>39</sup>。

## 5. おわりに

「愛すべき人」同様、かつて教科書で教えられていた英雄譚がある。抗日戦争中のエピソード「狼牙山五壮士」である。松戸庸子氏の研究によれば、この英雄譚には90年代から疑義が持たれていたがとくに問題になっていなかった。ところが2013年の夏にある男性ブロガーが疑義をツイートし拡散すると、行政拘留を受け、さらにはノートパソコンも没収されてしまった<sup>40</sup>。習近平政権成立後の政府方針の変化を感じさせる。

近年、英雄や烈士の顕彰はあからさまになっており、2018年4月には「英雄烈士保護法」が全人代で通過し、5月1日から施行された。この法律によって、英雄烈士の事跡や精神を歪曲したりけなしたりする行為は違法行為として取り締まり対象となる。また清明節や9月3日の抗日戦勝利記念日や9月30日の烈士記念日などには、英雄烈士をたたえる記念活動をおこない、称える作品を放送したり、記念行事を報道したりしなければならないらしい。

習近平は2014年10月15日、「文芸工作座談会」を主宰し「重要講話」をおこなった。そこで、「中華民族の偉大な復興を実現するためには、中華文化が繁栄し隆盛となる必要がある」とし「人民を中心とする創作の方向性を堅持する」よう求め、また「党の文芸工作への指導」を強調している。またべつのところでは、文革期の革命模範劇「智取威虎山」のリメイク作品である映画「タイガー・マウンテン」をほめそやし、こうした「良い物語」を現代風にアレンジすることを奨励している。

習近平自身はライバルであった薄熙来のような派手なパフォーマンスをすることはなく、カリスマ的要素はあまり感じられないが、一方で、民族復興のために民族の英雄が必要だと繰り返し強調し、また文芸作品で英雄を描くよう求めている。それはすでに始まっている米中覇権争いに民族統合のシンボルとなる民族英雄が必要であるということなのだろうか。毛沢東の「文芸講話」と同様に、「党の指導」や「人民」を強調する習近平の「文芸講話」がこれからどの程度影響力を及ぼしていくのか、注目していきたい。

- 
- 1 島田幸典・木村幹編著『ポピュリズム・民主主義・政治指導』ミネルヴァ書房、2009年。
  - 2 小山三郎「映画『武訓伝』批判について」『法学研究』68巻2号、1995年2月。吉田富夫「『人民日報』に見る『武訓伝』批判」『中国言語文化研究』第1号、2001年7月。

- 3 カス・ミュデ、クリストバル・ロビラ・カルトワッセル『ポピュリズム—デモクラシーの友と敵』白水社、2018年。
- 4 三品英憲「中国共産党の支配の正当性論理と毛沢東」『現代中国』第84号、2010年9月。
- 5 郭沫若「大会結語」1949年7月19日、『原典中国現代史 第5巻思想・文学』岩波書店、1994年、29-30頁。
- 6 『紅旗歌』については于風政『改造』河南人民出版社、1994年、94-99頁を参照。
- 7 同上書、99頁。
- 8 「關於朝鮮戦局和我軍採取輪番作戰方針給斯大林的電報」（1951年3月1日）中共中央文獻研究室編『建国以来毛沢東文稿』第二冊（以下、『毛沢東文稿』②と略記）、中央文獻出版社、1997年、151頁。
- 9 小林弘二『20世紀の農民革命と共産主義運動』勁草書房、1997年、148頁。
- 10 「中共中央關於糾正鎮圧反革命活動的右傾偏向的指示」中共中央文獻研究室編『建国以来重要文獻選編』第一冊、中央文獻出版社、1992年、420-423頁。
- 11 「關於鎮圧反革命分子的情況及近期計畫致中央華北局的報告」北京市檔案館編『国民經濟回復時期的北京』北京出版社、1995年、158-159頁。北京市委「關於大張旗鼓地處決反革命罪犯的反映和經驗致中央華北局的報告」3月31日、同前書、175-178頁。
- 12 抗美援朝運動については、拙稿「抗美援朝運動の広がりと深化について」奥村哲編『変革期の基層社会—総力戦と中国・日本』創土社、2013年、第8章を参照されたい。
- 13 孫瑜「編導『武訓伝』記」『光明日報』1951年2月26日。本稿では宋永毅主編『中国五十年代初中期的政治運動数据库—從土地改革到公私合营1949-1956』DVD（以下、『五十年代』と略記）から引用。
- 14 たとえば楊嘉林「我曾經為武訓流了多次眼淚—關於武訓与『武訓伝』問題學習的個人小結」『文匯報』1951年7月16日、『五十年代』から引用。
- 15 于風政、140頁。
- 16 武訓の故郷、平原省では教育庁が『武訓画伝』を300部購入して各所に配り、武訓の業績を称賛するよう「行政指導」までおこなったとして後に批判された。
- 17 賈霽「不足為訓的武訓」『文芸報』4巻1期、1951年5月1日。『五十年代』より引用。晴箴「武訓不是我們的好傳統」『進歩日報』1951年3月25日は未見。
- 18 「『武訓伝』討論提綱」『文匯報』1951年5月12日、『五十年代』から引用。
- 19 袁鷹『風雲側記—我在人民日報副刊的歲月』中国档案出版社、2006年、69頁。
- 20 「各方重視对電影『武訓伝』的討論」『人民日報』1951年5月23日。



- 21 中央批示「華北局宣伝部対処置現有記念武訓辦法的意見」1951年7月2日、『五十年代』から引用。毛沢東「關於記念武訓の學校、碑文和建築等處理辦法的批語」1951年7月7日、『毛沢東文稿』②、388頁。河北省委員會が華北局に處理方法について意見を提出し、指示を求めると、華北局宣伝部が7月2日に中央宣伝部に指示をおおぎ、毛沢東が7月7日に許可を与え、それが華北局、河北省へと下達されたようである。
- 22 林甘泉・蔡震主編『郭沫若年譜長編（1892-1978年）』第3巻 中国社会科学出版社、1387頁。
- 23 周揚「反人民、反歴史的思想和反現實主義的藝術電影『武訓伝』批判」『人民日報』1951年8月8日。
- 24 周揚「堅決貫徹毛沢東文芸路線—周揚在中央文學研究所的講演」1951年5月12日『人民日報』1951年6月27日。
- 25 「中共上海市委宣伝部關於『武訓伝』討論情況的來信」中央宣伝部『宣流通訊』第5期、1951年6月11日、『五十年代』から引用。
- 26 女教師役で出演した女優の黃宗英氏はインタビューの中でドイツ表現主義の影響を認めているが、アメリカ映画の影響については触れていない。吉川龍生「『武訓伝』批判とは何だったのか」『慶応義塾大学日吉紀要：中国研究』第7号、2017年。「武訓伝」批判のなかで具体的にアメリカ映画のどのような影響があるか述べているものはないようだ。  
孫瑜の経歴については、『現代中国事典』岩波書店、1999年、672頁。
- 27 「在審閱楊耳『評武訓和關於武訓敵宣傳』稿時加写的幾段文字」（1951年6月）『毛沢東文稿』②、375頁。
- 28 魏巍の本名は魏鴻杰、1920年河南省鄭州市の貧しい家庭に生まれる。小学生のころから創作を始め、新聞等への投稿をおこなう。師範學校卒業後、37年夏、延安を目指す。延安の抗日軍政大學で学び、共産党にも入党。日中戦争および国共内戦期は従軍し前線で取材をしながら創作を続ける。建国後、『解放軍文芸』の副主編に就任。50年12月中旬、朝鮮へ米軍捕虜の状況調査に派遣され、前線で3か月の取材をおこない帰国後、取材をもとに「愛すべき人」など11編の戦地通信文を執筆。1959年から20年間かけて創作した長編小説『東方』で第一回茅盾文學賞を受賞。2008年8月北京で病死。魏巍の経歴については、石洋「毛沢東批示：『誰是最可愛的人』印發全軍」『協商論壇』2008年第9期、熊坤静「通訊名篇『誰是最可愛的人』創作的的前前後後」『党史博采』2014年第9期、を参照。
- 29 現在は教科書に採用されていないが、このことを残念に思い、復活させるべ

きだとする意見も発表されている。陳麗莉「『誰是最可愛的人』応重新入選語文教材」『教学与管理』2009年4月。こうした愛国的教材の教科書への採用と消滅、およびそれに対する世論などは興味深いテーマであり、今後機会があれば考察したい。

- 30 ここでは『志願軍英雄伝』第一集、解放軍出版社、1956年第一版、2000年に再出版されたものを参照した。
- 31 姚康康「巍巍『誰是最可愛的人』的經典化道路」『鐘山風雨』2014年第5期。
- 32 異例の『人民日報』一面掲載について、石洋および熊坤静は『人民日報』社長兼総編集の鄧拓が原稿を読んで大変感動したためと説明しているが、鄧の独断であったのか疑問に感じる。
- 33 前掲、姚論文。
- 34 「王大海關於鎮圧反革命工作給毛沢東的報告」1951年6月15日、『五十年代』から引用。  
原典は中国共産党中央華北局辦公庁編『華北各省省委書記關於鎮圧反革命工作給毛主席的報告（第一輯）』1951年8月。
- 35 「転発中南局關於加強鎮反宣傳工作的指示的批語」1951年3月30日、『毛沢東文稿』②、202頁。
- 36 「転発西北局關於加強鎮反宣傳工作指示的批語」1951年4月17日、『毛沢東文稿』②、242頁。
- 37 「西安市各小学校在進行愛国主義教育中發生偏向」（1951年7月7日）新華社『内部参考』1951年119号、1951年7月9日。
- 38 中共中央宣传部『宣伝通訊』1952年第4期、『五十年代』から引用。
- 39 朝鮮戦争および抗米援朝運動に関連した作品には、有名作家による巴金『団円』や老舍『無名高地有了名』など3,000余りも創作された。こうした「抗米援朝文学」の果たした宣伝効果について、劉雲「抗美援朝文学的歴史功績」『軍事歴史研究』2013年第3期の研究がある。
- 40 松戸庸子「英雄譚に正当性を付与するための理論と情理」『アカデミア』（南山大学紀要社会科学編）第13号、2017年6月。



映画「武訓伝」



革命模範劇「智取威虎山」